政宗騎馬像余話

小室 達・日記から

▷8

伊達政宗騎馬像が仙台城跡天守台に到着したのは昭和十年五月十六日。除幕式は一週間後の二十三日に予定されており、制作者小室達は、疲労を押して騎馬像の据え付けや足場の組み立て、台座へのレリーフ取り付けなど忙しい日々を過ごした。

準備が完了、小室は式典で読み上げるあいさつ文もしたため、いよいよあすの除幕式を待つばかりとなった。が、この日、小室にとってはちょっと不愉快なことが起こった。「あすの作者のあいさつはなくした」というのである。除幕式当日の日記を読むと、それまでの喜びと興奮が薄れ、不満と怒りを隠し切れない小室の心情が伝わってくる。

5・23 早目に起き、現場へ駆けつけ除幕の準備をする。青年団員の力を借り、石の方も像の方も用意済む。名士続々つめ寄る。十時式を開始する。除幕は好都合にうまく行った。式場ではわれわれは虐待される。面白くなかった。

◇

落成の光と影

戦前の日本では、芸術家は今のようには尊敬されてはいなかったのだろう。除幕式で小室はわき役に追いやられ、主役の座は伊達家や名士に移った。新聞報道も先日までのお祭り騒ぎがウソのように消え、近寄りがたい荘厳さを印象づける。

—県連合青年団顧問に導かれた伊達登美子さま姫は真白き石段に一足、二足歩を進めて新緑に映える紅白の幕を引けば、二条のひもはサッと下りて、参列者一同思わずハッとする間に、赤銅色さんとして馬上ゆたかにまたがれる藩祖公は馬首を真南に、顔を東南に向けた凜（りん）然たる英姿に、五千に満ちた全県民参列代表は思わずえりを正して首をたれる。（5・24 河北新報）

この日夕、小室は友人たちと精養軒に行き、かねて作成していたあいさつ文を朗読、憂さを晴らし、気炎を上げた。

「本日除幕式の式典に列するの光栄得たるは余の最も欣幸とするところにして感慨無量なるものあり」で始まるあいさつ文は、政宗の遺徳をしのび、仙台藩に生まれた喜びを語って「心血を注ぎ一世一代の大作」を作り上げた誇りに満ちていた。鋳造や台座、運搬にかかわった"下積み"の人々にも感謝した後、次のように続けている。

「顧みればこの事業創始以来、ここに五星霜、その間、関係者各位の鋭意敢行の奮闘努力実に涙ぐましきものあり。ことに原型ならびに鋳造、台石の工程に際し、各方面の激励、声援、指導の力また偉大なるものあり。あるいは有益なる参考資料を提供して研究の便を与えられ、あるいは真心をこめて神仏にその成功を祈願せられ、また銅像運搬に際しては百万全の道を開き、一路平安を期し、通路沿道の各町村いずれも絶大なる歓迎の誠意を示さざるはなし。実に感涙滂沱（ぼうだ）として禁ずるあたわず。今日またその盛典に際し、感激さらに新たなるものを覚ゆ。謹んでここに満腔（こう）の謝意を表し、作者のあいさつとなす」

晴れの舞台で披露されることがなかった、幻のあいさつ文である。仲間を前に読み上げる小室の心中は複雑だったに違いない。制作者としての喜びは、除幕式のあった日から陰りを帯びたものになっていく。

この年の大みそか、小室は日記の補遺にこう記した。

—藩祖公大銅像も予定のごとく完成し天守台に無事鎮座せしめ、予期以上の好評を博した。しこうして鋳造に、台座に、及び運送に一大センセーションを巻き起こし歴史的場面のいかに多かりしぞ。（中略）仙台市始まって以来の人出、三百年前そのままの人々の歓迎、槻木町民（現柴田町）の祝賀、一つとして涙なしに会し得たろうか。余が一生を通じてかくも華々しい、生々とした人生がまたとあろうか。

◇

小室は不遇の晩年を予期していたのだろう。騎馬像の完成と待望の長男が生まれた昭和十年を境に、時代は芸術家がより住みにくくなる方向へと進んでいった。

小室のスクラップ帳に残されていた、大日本連合青年団発行の機関誌「青年」からの切り抜き。銅像除幕式の模様が写っている

幻のあいさつ文

みやぎ路

河北新報　昭和62年(1987年)5月16日掲載